

## 資本主義の向こう側Ⅱ猛暑の夏に考えたこと

——本と／で遊ぶ(3)——

酒 井 敏

はじめに

今年(二〇二三年)は「十年に一度の〇〇」とか「観測史上初の〇〇」とかの表現に何度も出あう、記録づくめの夏だった。中でも、九月下旬になろうというのに、まだ過去形で記せない異常な暑さ。人類の活動によって「地球の環境が大きく変えられつつある」「人新世<sup>①</sup>」の現実、急激に拡大した資本主義的生産活動がもたらした地球温暖化を思わずにはいられない。

温暖化対策について議論を深め、危機感を共有するには絶好の機会だったと思うのだが、現政権に限らず、そもそもこの国の政治が低い意識しか持っていないからか、マスメディアも含めて、管見の限りそんな機運はなかった。本稿は、そんな暑くもどかしい夏の拾い読みと考察の記録である。

## 一、マルクシズムの可能性

後述するように、近代の日本人——特に一般庶民——が資本主義に抱いた違和感や、資本主義の移入に関わる問題について当時の文学作品がどう描いていたかに関心を抱いていたので、以前「資本主義の終りか、人間の終焉か？」という副題に惹かれて読んだ『未来への大分岐』（マルクス・ガブリエル／マイケル・ハート／ポール・メイソン、集英社新書 二〇一九年八月）の編者斎藤幸平の『人新世の「資本論」』（集英社新書 二〇二〇年九月）を、まず読んだ。この二冊によって、斎藤は本稿が関心を寄せる問題意識を代表する論客になったように見える。その意味で、『積ん読』だった本書を今年になって繙いたのは、むしろ流行遅れかも知れない。

本書の主張は、既に「はじめに——SDGsは「大衆のアヘン」である！」で明確である。斎藤は「人類が築いてきた文明」を「存続の危機」(5頁)<sup>3</sup>から救う

正しい方向を突き止めるためには、気候危機の原因にまでさかのぼる必要がある。その原因の鍵を握るのが、資本主義にはかならない。なぜなら二酸化炭素の排出量が大きく増え始めたのは、産業革命以降、つまり資本主義が本格的に始動して以来のことだからだ。そして、その直後に、資本について考え抜いた思想家がいた。そう、カール・マルクスである。(6頁)

と述べ、「マルクスの『資本論』を折々に参照しながら、「人新世」における資本と社会と自然の絡み合いを分析し」(同)、「一五〇年ほど眠っていたマルクスの思想のまったく新しい面を「発掘」し、展開」して「気候危機の時代に、より良い社会を作り出すための想像力を解放」する、という(7頁)。つまり、新たに見出されたマルクシズムの

可能性によって、「気候危機の時代」への処方箋を示すのが本書の営みであるわけだ。

もはや旧聞に属するが、旧ソ連の崩壊に象徴される社会主義諸国の資本主義化によって、現実社会の政治システムとしてのマルクス主義は終焉を迎えたとされる。だとすれば、資本主義の枠内で気候危機に対応するのが、模索されるべき順当な方策と思われるのだが、斎藤に拠れば、資本主義を捨てない限り問題は解決しない。

資本主義は「人間を資本蓄積のための道具として扱う」と同様「自然もまた単なる掠奪の対象とみなす」ため、「そのような社会システムが、無限の経済成長を目指せば、地球環境が危機的状況に陥るのは、いわば当然の帰結」だからである（以上32頁）。

この説明には納得できるが、だからと言って、人類が簡単に、あるいは自ら資本主義を手放すとは思えない。例えば、人間は本能の壊れた動物であり、満足することのない欲望を本能に代わる動因として行動する、という人間観<sup>4</sup>に立てば、「無限の経済成長を目指す」す資本主義システムの運動が人類の行動原理と通じ合っているのは一目瞭然であろう。従って、斎藤も以下のように危機感を強調する。

資本主義がどれだけうまく回っているように見えても、究極的には、地球は有限である。外部化の余地がなくなった結果、採取主義の拡張がもたらす否定的帰結は、ついに先進国へと回帰するようになる。

ここには、資本の力では克服できない限界が存在する。資本は無限の価値増殖を目指す<sup>5</sup>が、地球は有限である。外部を使いつくすと、今までのやり方はうまくいかなくなる。危機が始まるのだ。これが「人新世」の危機の本質である。（37頁）

帝国主義の時代には宗主国が「外部」としての植民地から収奪を続け、現在では先進国がグローバルサウスからの「採取」によって欲望を満たしている。このような資本主義的経済活動は、有限の地球（かつて盛んに使われた

表現では「宇宙船地球号」という現実には直面させられることによって限界を迎えているわけだ。SDGsもその一つであるような、資本主義の存続を前提とする対策では、もはや間に合わない。「時間切れ」(同前)は目前であり、そこまで危機は切迫しているのである。かくて、資本主義に代わる新しい大きな物語としてのマルクシズムが召喚されたと言えよう。

ただし、斎藤が参照するマルクシズムは、従来のマルクシズムではない。マルクスが晩年まで作成し続けた膨大な「研究ノート」を解読することによって可能になった、「一般のイメージとはまったく異なる、新しい『資本論』解釈」(149頁)から導かれるマルクシズムである。要約すれば、「マルクスが最晩年に目指したコミュニズムとは、平等で持続可能な脱成長型経済」(195頁)であった。まさに、ここまでに見た資本主義システムの対極にある、気候危機から人類を救済する大きな物語だと言えよう。

しかし、それを実現する具体的な方法、ないし道筋となると、いささか首をかしげざるを得ない。斎藤は、「ヘコモン」、つまり、私的所有や国有とは異なる生産手段の水平的な共同管理」が、そのような「コミュニズムの基盤になる」と主張する(355頁)。例えば、「これまでもデンマークやドイツで進められ」「福島原発事故後に」「日本でも非営利型の市民電力が広がりを見せている」(260頁)という「市民電力やエネルギー協同組合による再生可能エネルギーの普及」(259頁)や「労働者たちが共同出資して、生産手段を共同所有し、共同管理する組織」としての「ワーカーズ・コープ(労働者協同組合)」(261頁)。さらに「第八章 気候正義という「梃子」」(325〜358頁)では、そのほとんどのページを費やして、二〇二〇年一月に「気候非常事態宣言」を発したバルセロナに始まる「フィアレシ・シテイ」のネットワーク<sup>5)</sup>が論じられる。

マルクシズムに抵抗があるわけでもなければ、全地球規模の気候危機に対して、それらの試みが余りにささやか

だと言いたいのでもない。斎藤がエリカ・チェノウエスの研究成果を参照しながら、フィリピンにおけるマルコス独裁の打倒もグルジア大統領シェワルナゼの辞任も「三・五％」の非暴力的な市民不服従がもたらした社会革命」の成果だったと述べている（362頁）ように、スタートはどんなにささやかでも、まず抗議の声を挙げることで、漫然と情性で流れてゆく現状を変革に導く可能性はあろう。しかし、

生産のヘコモン化、ミニシパリズム、市民議会<sup>⑥</sup>。市民が主体的に参画する民主主義が拡張すれば、どのような社会に住みたいかをめぐって、もつと根本的な議論を開始できるようになるだろう。つまり、働くことの意味、生きることの意味、自由や平等の意味をめぐって、オープンな形で、一から議論できるようになるはずだ。（356頁）

という斎藤の言葉をそのまま肯定するにはためらいを覚える。

この期待感は欧米的に過ぎると思うからだ。この国では「根本的な議論」を尽くせるほど強固な〈個〉も市民意識も成熟しておらず、「民主主義」も真に機能してはいない。「市民が主体的に参画する民主主義」と言葉では言えても、それでは単なる理屈、言葉遊びになってしまうのだ。この国の我々が気候危機と本気で向き合い、アクションを起こすには、未だ根付いていない言葉による論理ではなく、もつと情動的なアプローチ、心の深層に訴える言葉による促しが必要なのではあるまいか。<sup>⑦</sup>

危機感を共有でき、目指すべき進路も示してくれる充実した一冊なのだが、敢えて森鷗外「妄想」<sup>⑧</sup>のひそみに倣えば、「帽は脱いだ」「附いて行かうとは思はなかつた」。ここに記した違和感が、その理由である。

## 二、アニミズムと日本的心性

次に、ちょうど話題になっていた、ジェイソン・ヒッケル／野中香方子訳『資本主義の次に来る世界』（東洋経済新報社 二〇二三年五月）を読んでみた。<sup>④</sup>「絶え間ない拡大、すなわち「成長」の要求を中心として組織されている」資本主義システム（27頁）<sup>⑩</sup>が現在の気候危機の根本原因であり、そのシステムから脱しない限り、問題解決は不可能だとする点は『人新世の「資本論」と共通している。「公共財を脱商品化し、コモンスを拡大する」（232頁）など、問題解決のための具体的な方策にも重なり合う提言が多い。私が注目したのは、デカルト以来の二元論を否定し、「人間と他の動物との間に精神的交流があると信じ」る「精霊信仰（アニミズム）」（69頁）に危機克服の大きな可能性を見出している点である。

プリミティブな信仰としてのアニミズムは、超越神を持つ宗教が誕生するに従って敵視されるようになり、人間を神の「写し身」として「他の生物を支配する権利を与えられた」存在と位置付ける（70頁）ようになると、いよいよ周縁に追いやられるようになっていった。「科学の目的は「人間を自然の支配者、所有者にすること」だと主張した」デカルト（86頁）以来の二元論は、こうした背景の下に誕生し、「後に続く大勢の哲学者がリツイートし」（85頁）たことによって受け継がれ、資本主義システムの後ろ盾となつてゆく。キリスト教が唯一絶対の超越神を持つ宗教の典型であることを考え合わせると、資本主義を生み、推し進めたのが欧米であることも頷かれよう。

先にも見たように、資本主義的な「成長」は「外」を搾取することによって達成されてきた。二元論の立場からすれば「自然」も「外」であり、「成長」のために「経済の「外」に存在する「安い自然」（82頁）を搾取することとは当然の営みとなる。一方、「アニミズムの人間観は、二元論とは根本的に異なり、自然と「インター・ビー

イング（相互依存）の存在論<sup>オントロジ</sup>」（70頁）であった。自然を「外」とは見なさず、再生可能な範囲内で互恵的な関係結び、自らの利益のみを求めて収奪するような真似はしない。その意味でアニミズムもまた、明らかに資本主義とは別の大きな物語だと言えよう。素朴ではあるが、否、素朴だからこそ、アニミズムは、この惑星で心を持つまでに進化した生物としての人間の、まさにその心奥に存在する心性Ⅱ世界観だと考えられる。

アニミズムに寄せる著者の期待は、「アニミズムから二元論、そして再びアニミズムへ」（39頁）と題された節から「素晴らしい未来を垣間見る」（42頁）と題された節へと続く「はじめに」の展開や、本書の結びに当たる第6章が「すべてはつながっている」と題されていることに窺われよう。「成長」を求めて徒らに「自然」を搾取するのではなく、互恵的な節度ある関係を地球環境との間で結び直す。著者が目指す危機の克服Ⅱ資本主義の次に来る世界とは、それが達成された、言わば足ることを知る生き方を基本とする世界であろう<sup>①</sup>。

経済学の論理だけでなく、人間の生き方に相渉つて結論を見出している点で、私は本書により強く共感した。しかし、ふと考え直してみると、これほどの論述を費やしてアニミズムを再発見しなければならないのは著者がキリスト教世界の住人だからであって、我々の内部では現在なおアニミズムは当たり前のように息づいているのではあるまいか。

### 三、身近な日本的知に聞く

柳田國男に始まる民俗学の知見を想起するまでもなく、アニミズム、あるいは自然との共生感覚と聞けば、「風の谷のナウシカ」（一九八四年）や「となりのトトロ」（一九八八年）さらに「もののけ姫」（一九九七年）など宮

崎駿の諸作品、あるいは、動植物はもとより無生物である火山弾などとまで交感する、宮沢賢治の作品世界がすぐに連想されよう。

むしろ陳腐とさえ映りそうなので、作品個々の分析は避け、本稿のテーマと関わる「没後90年 賢治に共感今こそ」という見出しの新聞記事（『朝日新聞』二〇二三年（令和五年）九月二二日）を梃子にして叙述を進める。中でも、「賢治の作品は新自由主義的な考え方への反発でもある」と受け止める版画家佐藤国男の発言に注目したい。佐藤は『銀河鉄道の夜』や「セロ弾きのゴーシュ」を例に、賢治の作品を「いわゆる『いじめられっ子』の物語と呼べるかもしれない」とし、「賢治は『競争』という言葉が大嫌いで、童話の中でも競争社会を皮肉つたものが多い。競争から落ちこぼれがちな、いじめられっ子を物語の中心にすることで世界を風刺し」ていると指摘する。この指摘の意義は、「いじめられっ子」を「マイノリティ」と置き換えれば、より強く実感されよう。正に「新自由主義的な考え方」が跋扈する現代社会に対する風刺・批判としても読めるわけだ。「社会主義国家」との併存を意識しない、むき出しの欲望を作動因とする資本主義の苛烈さは、賢治の時代と何ら変わらない。要するに、その苛烈さこそ資本主義の本質なのである。

物言わぬ自然もそうであるように、「いじめられっ子」「マイノリティ」の存在は認識されにくい。彼らの声は主流派の大きな声にかき消され、仮に聞き分けられたとしても、しばしば雑音として一蹴されてしまうからだ。しかし、その雑音の中にこそ、現状に対する違和感、主流派の大きな物語を相対化する芽が潜んでいるのである。森の木一本一本に個性があり、目の前を流れる川の中では蟹の親子の日常生活が営まれている——そう眼差したとき、自然は単なる「外」に搾取対象ではなくなるだろう。そこには命が息づいており、その命によって、さらにはその命をいただくことによって、自分たちの生存が維持されている。そう実感できるならなおさらだ。こうしたアニメズム



は現在なお、自然と向き合う私たちの心性の中に、何ほどか残っているのではなからうか。本章の冒頭に掲げたように、宮崎駿や宮沢賢治の諸作品が私たちの心に響くのは、その証左に他なるまい。

そして、資本主義システムの導入によって近代化を進めるこの国にあって、そうした違和感や聞きとりにくい声に耳を傾けることにこそ、近代文学の使命があった。こう書くと、小林多喜二の『蟹工船』や徳永直の『太陽のない街』（ともに昭和四（一九二九）年）などプロレタリア文学がまず挙げられそうだが、むしろほとんどの小説が何らかの形でこうしたモチーフに繋がっていると云ってよい。森鷗外の『雁』（靑山書店 大正四（一九一五）年）を例にして述べてみよう。

一般には、東京大学の裏・無縁坂に囲われて棲む高利貸し末造の妾・お玉と医学部学生・岡田との、はかない恋の物語として知られているだろうが、それが全てではない。「明治十三年の出来事」（118頁）として語られる、その物語の深層に潜められたドラマを、かつて以下のように要約・紹介したことがある。<sup>(13)</sup>少々長くなるが引用してみよう。

（末造はコキユ、あるいはピエロなどと読まれて、あまり重視されてこなかったが・酒井注）実は、鷗外は高利貸しを「所謂十九世紀の紀末からこのかたの世間を指して言ふ」意味で「現世間を代表するに、最も適切なもの」と捉えていた（『金色夜叉上中下篇合評』）。高利貸しは、飽くことを知らない欲望の権化として、資本主義社会を象徴する存在なのである。

一方、お玉は強引に増入りしてきた巡査に裏切られ、「井戸へ身を投げ」ようとした過去を持つ。警察制度は近代の産物であり、文字通り「開化と云ふものが襲つて」きたのである。末造の妾として生きることを強いられるのも同様に意味付けられ、お玉は近代に侵犯され続ける存在だ。

こう考えてみると、「学期毎に試験の点数を争」おうとはせず、「級の中位より下には下らずに」「均衡を保

つた書生生活をしてゐる」岡田の存在が際立つ。岡田は末造の対極にある、足ることを知った存在なのだ。お玉が岡田に惹かれたのは、「美男」だったことだけが理由ではない。

しかし、洋行を選んだ岡田は、エリートとして日本の近代化の一翼を担われるであろう。岡田的なものは、かくして「永遠に」失われた。はかない恋のすれ違いを描いた物語の深層には、こんな象徴的なドラマが隠れているのである。（413頁）

つまり、そこには、近代の初発期になされた選択とその意味が象徴されていたわけだ。『雁』の連載が開始されるのは明治四四（一九一一年）年。明治も終わろうとするこの時期、日本の資本主義もようやく成熟し、それに伴って社会的矛盾もまた顕在化してきていた。言わば、鷗外は『雁』において、そうした矛盾が生じる根本原因がこの選択にあるとの認識を示して見せたのである。

ここで移入された新しい考え方（＝資本主義）は、それ以前とどんなふうに違っていたらうか。「陸」に描かれた、料亭で目見えをするに当たつての高利貸し・末造の「処置」をめぐる一節を引用して具体的に見ておこう。

そこで当前あたりまへなら支度料幾らと云つて、纏まとまつた金を先方へ渡すのであるが、末造はさうはしない。身なりを立派にする道楽のある末造は、自分丈の為立物したてものをさせる家があるので、そこへ事情を打ち明けて、似附かはい二人の衣類を誂へた。只寸法丈を世話を頼んだ婆あさんの手でお玉さんに問はせたのである。気の毒な事には、この油断のない、吝な末造の処置を、お玉親子は大そう善意に解釈して、現金を手渡し渡されぬのを、自分達が尊敬せられてゐるからだと思つた。（147頁）

「お玉親子」が「末造の処置」を「自分達が尊敬せられてゐるからだと」誤解してしまったのは、特に相手が目上である場合、そもそも現金を贈ることが失礼とされているからであらう。「妾奉公」という言葉があるように、

末造は言わば自分たちの雇い主であり、明らかに上位の強い立場にある。にも関わらず、非礼に当らないよう、自分たちを立ててくれたと受け取ったわけだ。端的に「吝」と形容されているように、末造の目的は少しでも出費を減らすことであつて、相手を重んずるつもりなどないのはもとより、儉約に対する「油断のな」さ、目的に向かう計算高い冷めた合理性が際立つ。

現金を贈ることを非礼とするマナーの背景には、多くの時間と手間をかけて相手のために品物を選ぶ、贈り手の想いの深さにこそ価値を見出す心性があるろう。それに対し、新たに登場した資本主義は、要領よく合理的に物事を進める速さを尊ぶ<sup>(14)</sup>。単なる吝嗇や儉約を資本主義と呼べないのは当然であるが、ここに描かれたお玉親子の麗しき誤解には、それ以前と新しい考え方との齟齬やずれが見事に映し出されていると言えよう。現在もお息づいているアニミズムに加えて、こうしたずれが生み出す素朴な違和感に従つて自らの行動を見直すことにも、この国において資本主義の向う側を実現する可能性が見出せるに違いない。お玉親子のエピソードから効率や速さの優先とは違う価値観が窺えたように、それが自然な心の動きに従つて資本主義を相対化する手掛かりになるのだから。

### おわりに

本稿の執筆に当たつて、二〇二三年八月二三日に『朝日新聞』「多事奏論」欄に掲載された「今こそ小日本主義／閉塞する政治 湛山なら？」という記事（署名・編集委員原真人）から示唆を受けた。石橋湛山を再評価する気運の存在は知っていたが、篠原孝立憲民主党衆議院議員が「農水省課長補佐だった1985年」に発表したという「新・小日本主義の勧め」という論考に出会えたのである<sup>(15)</sup>。

早速、掲載誌を検索して一読、「二一世紀は省資源、省エネルギーの時代であり、人類の新しい生き方が求められ」として、日本は「リサイクル的自立国家を目指す」すべきだと主張する先見性の高さに驚いた。資本主義的な「競争の原理」には「一定の自制が必要」と、正に「足ることを知る」重要さに関わる主張もあり、今後の日本は「地球村」の一員として村人全員の豊かさを考えるのが必然」だと論ずるのには、これからの人類が「宇宙船地球号」の閉じられた環境で生きてゆかざるを得ないという事実が、既にきちんと認識されている。欲望を野放しにせず、相互に自制し合つて生活するのは、限られた列島の環境で自給自足する知恵であつた。人類の活動によつて地球環境が危機を迎えている現在、それは地球規模で必要とされる知恵に他ならない。まさに筆者の主張の通り、「自然と調和して持続的な生き方をしてきた日本人の英知」に基づいて「世界をリードする気概を持」つべきだつたのである。もし、「世界のGNPの一〇%を占める」世界第二位の経済大国だつた三八年前の日本が、この方向に舵を切つていたら――。取り返しのつかない立ち遅れ、そして失われたものの多さを思わずにはいられない。

記事に拠れば、篠原議員が「党内で研究会を立ち上げた」のを契機に「与野党の国会議員44人が議員連盟「超党派石橋湛山研究会」を発足させた」という。空白の三八年、就中、第二次安倍内閣が発足した二〇一二年以降、この国は環境危機の問題に関心が希薄、と言うよりむしろ逆行するような動きしか示していないように見える。もはや実効性のない議論で時間を空費している猶予はなからう。政局や既存の政治権力、従来の方針などから自由に、一刻も早く有効な方策を立案して危機の克服に向かう行動を起こして欲しい。

先にも引用した「妄想」の中で、主人公は「洋行帰りの保守主義者」(207頁)として、西洋に倣つて住空間や食習慣、正書法などを変えようとする議論に対して「元の李阿弥説」(206頁)を唱え続ける。なぜなら「何千年といふ間満足に發展して来た日本人が、そんなに反理性的生活をしてゐよう筈はない」(208頁)からだ。本稿では、こうした

姿勢にこそ資本主義の向う側を模索する手掛かりがあると述べてきた。もとより純粋に経済システムを論ずる能力はないが、それが人々の生活に広く影響を及ぼす問題である以上、文学を場として考えることも許されよう。地球温暖化Ⅱ気候危機もまた、誰もが関心を抱かざるを得ない問題である。この夏の猛暑に苦しんだ経験から、できる限り具体的に、自分なりに考えたことを綴ってみた。門外の所見ではあるが、問題を自分事として捉えるきっかけとなれば幸いである。おそらく、誰もが真剣に向き合う以外、私たちが直面している危機を打開する可能性は生れてこないのだから。

## 注

- (1) クリストフ・ボヌイユ＋ジャンⅡバティスト・フレソズ／野坂しおり訳『人新世とは何か 〈地球と人類の時代〉の思想史』(青土社 二〇一八年四月)。直近の新聞記事「人類の爪痕残る人新世―新たな地質年代提案へ」(名古屋本社版『朝日新聞』二〇二三年(令和五年)七月二日。以下、『朝日新聞』とある引用は全て名古屋本社版に拠る)も参照。ここでの引用は後者に拠る。なお、「人新世」という語は、オゾン層破壊物質の発見によりノーベル賞の共同受賞者となったオランダの化学者パウル・クルッツェンの造語」であり、クルッツェンが『ネイチャー』誌に「人類の地質学」を二〇〇二年に発表して以降、次第に広まったという(エリザベス・コルバート／鍛原多恵子訳『6度目の大絶滅』NHK出版 二〇一五(平成二七年)年三月。147、149頁)。
- (2) 古賀茂明『分断と凋落の日本』(発行…日刊現代／発売…講談社 二〇二三年四月) 参照。
- (3) 以下、本章において『人新世の「資本論」』からの引用は頁数のみを示す。
- (4) 心理学者の岸田秀は『ものぐさ精神分析』(青土社 昭和52年6月)以来、このように繰り返し主張している。

(5) 「フィアレス・シティ（恐れ知らずの都市）」（328頁）とは、国家が押しつける新自由主義的な政策に反旗を翻す革新的な地方自治体を指す。（同）と説明されており、さらに「このように国境を越えて連帯する、革新自治体のネットワーク精神は「ミュニシパリズム」と呼ばれている。」（338頁）と叙述される「ミュニシパリズム」が、斎藤の提示する処方箋を構成する重要な要素となる。

(6) 「市民議会」とは、「くじ引き」によって選ばれ「年齢、性別、学歴、居住地などが、実際の国民の構成に近くなるように調整され」たメンバーが専門家のレクチャーを受けた上で「議論を行い、最終的には、投票で全体の意志決定をする」試みを指す（217頁）。

(7) ここで斎藤が提示した資本主義を乗り越えて気候危機を克服するための処方箋が、個人に立脚して一人一人の行動から変えてゆこうとする、言わばボトムアップ型とするなら、エドガール・モランが『叢書』ウニベルシタス<sup>422</sup> 祖国地球―人類はどこへ向かうのか』（菊地昌実訳、法政大学出版社 二〇二二年一月）（新装版／初版 一九九三年二月）で

不平等を減少し、飢えた者を養い、資源を分配し、人口増加の速度をゆるめ、環境悪化を食い止め、労働の質を変え、調整と保護のための地球規模の種々の最高決定機関を創設し、国連を発展させて真の国際連盟とし、地球を文明化することは、技術的、物質的に可能である。（145頁）

と主張する「地球を連邦化する」（127頁）という構想は、世界システムの方からかえてゆこうとする点で、対照的なトップダウン型の処方箋と言える。

また、『世界史の構造』（岩波書店 二〇一〇年六月）、『力と交換様式』（同前 二〇二二年一月）の柄谷行人も、「交換様式」の観点から「資本ⅡネーションⅡ国家」の乗り越えを模索し、「互酬（贈与と返礼）」の「高

次元での回復」によつて「カントが『永遠平和のために』で提起した「世界共和国」の構想」が「回帰する」（『力と交換様式』396頁）と言う（『世界史の構造』が「第四部 現在と未来／第二章 世界共和国へ」で閉じられることも付記しておく）。現在の世界システムを組み換える、より高次の審級を提示している点、モランと共通していると言えよう。共に興味を惹かれる指摘だが、個人の心情に訴える情動的なアプローチを関心の中心とする本稿においては、以上の紹介に止める。

(8) 『三田文学』明治四四年三、四月号掲載。鷗外が主人公に託して自身の思想遍歴ないし精神史を語った小説とされる。引用は『鷗外近代小説集』第五卷（岩波書店 二〇一三年一月）に拠る（引用箇所は214頁）。

(9) 本書の刊行以前であるが、ディビッド・ウオレス・ウェルズは『地球に住めなくなる日―「気候崩壊」の避けれない真実』（藤井留美訳、NHK出版 二〇二〇年三月）で、「無政府主義よりの左派に属するジェイソン・ヒッケルは、気候変動が経済成長への依存症を断ちきつてくれることを期待する。」（238頁）と、著者ヒッケルについて揶揄的と映るコメントを記している。

(10) 以下、本章において『資本主義の次に来る世界』からの引用は頁数のみを示す。

(11) 『ローマクラブ『成長の限界』から半世紀 Come On! 目を覚まそう!―環境危機を迎えた「人新生」をどう生きるか?』（エルンスト・フォン・ワイツゼッカー、アンダース・ワイクマン編著／林良嗣、野中ともよ監訳、明石書店 二〇一九年二月）にも「「足るを知る」という新たな文明の価値観」（212頁）の必要性を訴える一節がある。

(12) その端的な表れとして、アイヌ民族の神謡集『カムイ ユーカラ』やイヨマンテ（熊祭）などの習俗は、まだ私たちの記憶の中に具体的なイメージを伴って存在していよう。

(13) 「解題「雁」」(『鷗外近代小説集 第六卷』岩波書店 二〇一二年一〇月)。「雁」の引用も本書に拠り、頁数のみを示す。なお、この「解題」は拙著『森鷗外とその文学への道標』(新典社 平成一五年三月)所収の『雁論(1)―末造と岡田の造形をめぐって―』『雁論(2)―「雁と云ふ物語」と作品「雁」―』に基づく。合わせて参照いただければ幸いである。

(14) エドガール・モランも「私たちの文明は速度の病にかかっている。狂った競走、過熱の危険を自覚すること何よりも急を要する。」(前注(7)同書、170頁)と指摘しており、この問題を中心テーマとする『加速する社会―近代における時間構造の変容』(ハルムート・ローザ／出口剛司監訳 福村出版 二〇二二年七月)も刊行された。「速度」は資本主義による歪みを考える際の重要なファクターと言えるよう。

(15) 例えば、同紙の「オピニオン&フォーラム 交論」欄に「石橋湛山先見の思想」として姜克實「分権と教育で人を生かす経済」と上田美和「個人の自立守る自由主義重視」が掲載されている(同年七月一三日)。

(16) 「新・小日本主義の勧め―寄生的通商国家からの脱却―」(『週刊東洋経済』昭和六〇年一月二日特別号)。ただし、本文中に「拙著『農的小日本主義の勧め』(柏書房)の第八章「新小日本主義の勧め」において概ねその考え方を明らかにした。」とある通り、「8 新小日本主義の勧め―リサイクル的自立国家を目指して―」として同書(同年二月一〇日刊)に書き下ろしで掲載された論考が先行している。本稿の引用には前者を用いた。「農的」の語義について、「工的(寄生的、資源浪費・環境汚染的)に対するもの」で「自立的、資源リサイクル・環境保全的」との意味」との自解がある。

(17) 一九八〇年に執筆されたという制約もあって、地球環境の危機に対する直接の言及はない。しかし、エネルギー政策において「省資源・省エネルギー」だけでなく、今日で言う再生エネルギーに相当する「小水力、太



陽熱等」も挙げられている。当時、風力発電や太陽光発電の有効性が未だ確立されていなかった事情を考慮すると、筆者の主張する方向性において再生エネルギーが重要視されていたことが窺われよう。

# 【付記】

※なお、「史上最も暑かった12カ月」（『朝日新聞』二〇二三年（令和五年）一月一〇日）に拠れば、「昨年11月から今年10月までの12カ月は観測史上最も暑く」「世界の平均気温は、化石燃料を大量に燃やし始めた産業革命前から1・3度高くなつた」という。「熱波や洪水など気象災害によつて今年だけで約10兆円を超える経済的損失があったと推定され」るが、「次の12カ月はさらに暑くなるおそれがある」とも指摘されている。この記事が、この分析を発表した米国の研究機関の「アンドリュー・パーシング博士は「人々が経験していることと気候変動を結びつけることが重要だ。石炭や石油、天然ガスを燃やし続ける限り、こうした影響は拡大する」と話した。」との警鐘で結ばれているように、もはや他人事ではない。政治の覚醒を促し、具体的なアクションを起こすことが急務なのだ。にも関わらず、この記事の紙面での扱いは決して大きくなかった。何とも寂しい限りである。

※さらに、一月三〇日に国連気候変動枠組条約の第28回締約国会議（COP28）がドバイで始まったのを受けて、「史上最も暑い年／2023年、12万5千年前以来」「損失と被害」基金始動への記事が同紙に掲載された（二月一日）。はかない望みながら、危機感を共有して有効な気候危機対策が決定され、一日も早く実行に移されることを期待する。